

平成 26 年度研究プロジェクト

「サハラ地域におけるイスラーム急進派の活動と資源紛争の研究」分析レポート

北部ナイジェリアのムスリム・コミュニティとイスラーム改革運動

南山大学人文学部教授
坂井 信三

はじめに

今日のセネガル、マリ、ナイジェリアなど西アフリカ内陸のサヘル地帯に位置する国々は、19 世紀をとおして相互に連動した激しいジハード運動を経験している。その中で成立したイスラーム国家の記憶は、これらの国々のムスリムにとって、今も自らの宗教的、政治的な正統性をふり返る際の基盤になっている。

2010 年以降、メディアをとおして世界の耳目を引きつけてきた「ボコ・ハラム」の背景には、国際的なテロリズムとの連携があるとされることが多い。だが歴史的に見ると、少なくともその発生と成長の過程においては、北部ナイジェリアのムスリム・コミュニティの内在的な要因が大きく関わっている。

この報告では、そのように過激なイスラーム主義運動が生まれてくる土壌を理解するために、植民地化から現在までをとおして北部ナイジェリアのムスリムにとって宗教的・政治的正統性がどのように追求されてきているのか、歴史人類学的に検討してみたい。

1. 間接統治下のイスラーム国家

北部ナイジェリアのムスリム・コミュニティは、19 世紀初めにフルベ人ウラマー、ウスマン・ダン・フォディオがイスラーム改革のジハードによって樹立した「ソコト・カリフ国」(1809-1903)を背景としている。

フランスの直接支配下でイスラーム国家が完全に解体されたセネガルやマリと違って、北部ナイジェリアではイギリスによる間接統治の下で「植民地カリフ国」という半独立的な体制が作られた。今日のナイジェリアのイスラーム事情の理解には、この矛盾をはらんだ体制がもたらした政治的・宗教的効果を解明することが重要である。

半世紀以上にわたった「植民地カリフ国」体制は北部ナイジェリアのイスラーム化を押し進め、ムスリム・コミュニティの基盤を強化したといわれる。しかしその反面、イギリスへの従属の下でアミールの権威とシャリーア法廷が存続するという権力構造の二重化、ウラマーを養成する伝統的なイスラーム教育と政治エリートや司法官吏を養成する近代的学校教育という異質な教育制度の併存は、ムスリム知識人層の間に対立する分派を作り出す結果になった。また植民地時代をとおして、西欧的な世俗教育に対する一般ムスリムの不信感が解消することがなかった事実には、ウンマのイスラーム的正統性に関する民衆の疑念や不安の表れを読み取ることができる。

2. 連邦制による独立と北部州のムスリム・コミュニティ

1960 年のナイジェリア連邦共和国の独立は、北部ナイジェリアをめぐる状況をさらに複雑化させる結果になった。資源に乏しい北部にとって、連邦への加盟は独立のために不可

避のことだった。そのために北部州のイスラム政治エリートは、地方政治のレベルではシャリーア刑法の廃止をとまなう司法制度の改編を受け入れ、連邦政府のレベルではキリスト教徒に対抗してイスラム勢力を維持するという、両面的な課題を抱えながらイスラム・コミュニティを指導していくことになった。

3. スーフィー教団間の確執とサラフィー主義

北部イスラム・コミュニティは Northern People's Congress (NPC) を組織し、ナイジェリア連邦共和国は NPC の優勢下で独立国として出発した。だが 1966 年のクーデターとその後 1970 年まで続いたビアフラ戦争の結果、北部州の政治的影響力は低下した。しかもその間スーフィー教団間の確執のために分裂したイスラム・コミュニティは、1970 年代末に第 2 次共和制の憲法制定と国政選挙の過程でキリスト教徒勢力に敗北し、独立時に構想されていた北部州の自治の可能性は失われてしまった。

そうした状況で、サウジアラビアのサラフィー主義の影響を受けた若い世代のウラマーたちがスーフィー教団に対する批判運動をおこす。州政府の権力者はスーフィー教団と結合していたので、1970～80 年代には伝統的なウラマーの権威と州政府の腐敗に不満をもつ一般のイスラムの間にも、イスラーム的反体制運動に対する共感が広まっていった。

4. シャリーア再導入運動

1980～90 年代くり返すクーデターと長引く軍事政権の下で、やがてサラフィー主義的な若いウラマーたちの間から、かつて独立のためにイスラム政治エリートが選んだ妥協は過ちであり、「社会を改革し、規律ある国民を育成し、蔓延する犯罪と戦う」ためにシャリーアに復帰すべきだという主張が目立ってくる。90 年代末までには、あらゆる社会悪は西欧の支配によってもたらされたもので、そこから抜け出すにはシャリーアに復帰する以外に方法はないという認識が、民衆の間にも広く浸透していった。

1999 年、第 4 共和制による民政復帰とともに、サラフィー主義の運動家たちは北部諸州でシャリーア復帰のキャンペーンを展開し、その結果 2000 年代初頭に、民衆の広範な支持のもとで北部諸州は次々と雪崩を打つように刑法を含むシャリーアを再導入した。

5. 運動の過激化と活動領域の拡大

だが現実には、北部諸州政府はシャリーア施行に積極的でなかった。幻滅した運動家たちはふたたび政府から離反し、そこから新たなそしてさらに過激なイスラーム的反体制運動が生まれてくる。2002～3 年頃に出現した「ボコ・ハラム」の起源もそこにある。

また反体制運動の過激化の背景には、ナイジェリア連邦警察・軍による過剰な暴力的弾圧もあった。とくに、2009 年に「ボコ・ハラム」のリーダー、ムハンマド・ユースフが連邦警察によって殺害されたあと、その活動は北部諸州だけでなく連邦首都のアブジャにも拡大し、襲撃の対象も警察署や軍事施設だけでなく国連事務所、キリスト教の教会などに広がった。

「ボコ・ハラム」の活動は、2000 年代初めは北部諸州レベルの反体制運動だったが、2010 年以降、連邦政府に敵対するイスラーム主義運動に成長し、さらに 2013 年以降は隣国カメルーンにまで活動領域を広げている。今日の「ボコ・ハラム」は、歴史的に見ればかつて

の植民地国家に由来する国境線が無視し、近代国家のシステムそのものを否定するジハード運動にまで変成している。その意味では、「ボコ・ハラム」は「イスラーム国 (Islamic States, IS)」と同様の性格を備えるようになったといえるかもしれない。だがその背景は国際的なテロ組織の連携ではなく、北部ナイジェリアのムスリム・コミュニティーに内在する歴史的要因にあるのである。